

村を歩く——工作隊との一二〇時間

田原史起

筆者は二〇〇二年三月、山東省P

市S村において、偶然の成り行きからではあるが、同村に派遣されていた工作隊と同じ屋根の下で暮らす、という機会を得た。わずか五日間の滞在であり、そこで目にしたことは問題のごく表面に過ぎないが、中国の末端政治の理解に益する部分も少しはあるかと思う。

工作隊というのは、基層における各種の問題を解決するために上級政府が臨時に編成し、派遣するチームである。歴史的には、五〇年代の土地改革運動や六〇年代の社会主義教育運動など、かつての政治運動の発動においては、必ずこうしたチームの末端への派遣が見られた。また近年多く見られるものに、「扶貧」すなわち貧困問題の解決を目的とした派

遣がある。

こうした工作隊の派遣は、個別の歴史的状况には関わらず、①末端政権が期待されている自己管理能力、問題解決能力を欠いている場合、または②末端政権の活動に対して上級政権が何らかの不信感を抱いている場合、に行われる点で共通している。毛沢東時代から改革開放の現在にいたる普遍性ということを考えると、それ自身が共産党政治、ひいては中国における末端権力の構造的性質を体現するもののようにも思える。

「問題のある」村

S村はP県域から、車で約二五分ほど東に行った幹線道路沿いにある。S村を管轄するD鎮は、幹線道路沿いに位置するうえに、沿海部で

もあり、P市の中ではむしろ豊かな一帯に属している。本村の一人当たり収入は三五〇〇元、決して貧しい部類ではない。だが、曲がりなりにも工作隊が住み込んでいるということは、この村が統治当局から見た際に何らかの「問題」を抱えている、ということを示している。

村に入った当初、S村の「問題」も貧困にあるのかと思ったが、現在のP市での工作隊は、その正式名称を「総合整治領導小組」（総合的な整頓を指導するグループ）ということからも分かる通り、貧困よりもむしろ指導部の組織のあり方をターゲットにしているようだ。工作隊員自身の言によれば、S村の組織の問題は、党支部書記と村民委员会主任の二つのポストを二人の人物が分け合っているために、まとまりにくい。そこで三月の終わりから五月にかけて行われる次の選挙で、書記と主任の職を同一人物によって兼任させるように指導するプランをもっている

ようだった。もっとも、村民の訴えを聞くにつれ、事態はよりドロドロとしており、集団所有地の売却とその利益の私物化など、現職幹部によるさまざまな「実力主義的」営為が見られ、S村の組織問題は、決して「まとまりにくい」という程度に止まらないことは明らかであった。

経済であれ何であれ、村全体を「総合的」に正していこうとすれば、その核心にあるのは必ず人の問題であり、より端的には、リーダーシップの問題である。現実には、「扶貧」の工作隊であっても、基層組織の「整顿」を、貧困問題解決に不可分な要素と見なしていることが多い。

P市は九つの郷鎮、六〇七の行政村を管轄するが、そのうちの四〇か村（約七％）に四人一組の工作隊が派遣されており、現地に住み込み、丸一年間の時間をかけて組織的な整顿を行っている。S村チームの隊長はP市規画建設管理局のC副局長、隊員は四〇年輩のL先生（第一中学

教員）、三〇歳くらいで温厚なZさん（規画建設管理局）、大柄な青年Jさん（規画建設管理局）の三名である。四人は、村に住み込んでからまだ二週間ほどであった。

彼らが住居としており、筆者も一緒に泊まり込んだ場所は、三部屋と台所付きの、無人民家をそのまま利用した家屋である。三部屋のうち、向かって左の部屋を隊長のC局長が使用し、中央の部屋が食堂兼出入り口、台所に隣接した右の部屋が隊員の寝床となる。若い二人がこの部屋のオンドルの上で眠り、L先生がベッドを使用していた。便所は中庭の西南端にあり、老朽化して相当の汚かった。中庭は当初、土がむき出しであったが、筆者の滞在中に作業員がやってきてコンクリートで固めた。一年住み込むのであるから、それくらいの環境改善は必要ということだろう。

四人の生活は非常に規則正しい。朝は六時一五分に起床し、それぞれ

顔を洗ったり、床の掃除や食事の支度などを手分けして始める。水道の水は六時半から三〇分間しか出ないため、そのうちに一日分の水を大きなカメに溜めておかなければならない。この水を大切に使うのである。昼間は村民の家を訪ね歩いて情報を収集したり、鎮での会議に参加したりするが、土曜、日曜は休日となり、また何週間か一度は県城の自宅に帰って休息することも許されている。

こうして工作隊の活動のかんりの部分は、彼ら自身の身の回りの世話、なかでも日々三度三度の食事の準備に費やされる。ふだんの食事は、マントウや粥、麺類を主食に、キュウリ、レンコン、落花生などを洗面器一杯に漬け込んだものを副食とする。かなり質素ではあるが、マントウの小麦粉をこねるところから全て自分たちで準備するので、結構な手間がかかる。

筆者はかつて論文の準備のため

に、五〇年代の土地改革工作隊の経験者から多く聞き取りを行ったことがある。土地改革の指導は、日々の情報収集や、大衆大会の開催のために、睡眠時間も削るほどの忙しきであつたと彼らは回想していた。それに比べると現在の工作隊は農民と接触することが少なく、身辺の雑事ばかりをせつせとこなしているようにみえる。

隊員の三人がひたすら真面目に規則正しく暮らしている一方で、C局長は鎮の幹部らとD鎮での宴会に繰り出していることが多かった。日曜日などは鎮の幹部や県内の企業家らを呼んで、工作隊の居住地で宴会を開くこともあつた。宴会なので当然酒もでる。ナマコなどの海産物をはじめ、一寸珍しい食材を仕入れて来ては、P市の政界、財界の知り合いを招き、局長は自らの人脈を最大限に張り広げるために活動しているようだ。彼は粗暴な気風に似合わず料理にはマメであり、炒めものの最終

的な調理は自ら担当し、最後にしっかりと味見をしてから皿をテーブルに運ばせるのだった。単調な村での生活の中、「食」にはかなりの執着心をもっているようだった。

大衆路線の伝統？

組織的整頓を始めるための準備段階として、入村したばかりの工作隊は、まず村の全世帯の八〇%まで、というと約二〇〇世帯への訪問を行い、問題の所在を発見することが義務づけられている。たとえば筆者が居合わせた三月八日の場合、午前中に五軒、午後二軒を訪問した。訪問の形式は、「何か要求はあるか」と尋ねて、自由にしゃべってもらおうというもの。かつての土地改革の場合だと、これが「貧しい農民を訪ね生活の苦労について尋ねる」(訪貧問苦)の活動に相当するだろう。

奇妙であるのは、記録係りのZさんがときどき簡単にメモを取る以外は、だれも農民の話に口を挟んだり、

確認したりはしないことである。言うなれば「聞きっぱなし」という感じである。すなわち彼らは、農家を訪問することで具体的に何か情報を得ようとしているというよりは、組織の指示にしたがつて農家を訪問すること自体が目的であるように見えた。あるいは農民の口から次々とあふれ出す、細々とした具体的な訴えは、彼らには情報として些末で価値のないものに思えたのかも知れない。

八二歳の独居老人宅を訪ねたことがあつた。絶好の話し相手が来たと思つたのか、老人は我々が部屋に入るなり、突つ立つたまま、椅子を勧めめることもせず、しゃべり始めた。部屋には暖房用の石炭のにおいが充満し、椅子に腰掛けた若き毛沢東のポスターが貼つてある煤けた壁に染みつくようだった。床には如雨露のささったままの湯たんぽが転がり、子犬が短い尾を振つて弱々しく歩き回る。

山東方言は初めての耳には非常に抵抗があったが、断片的には聞き取ることができ、老人は過去に四一年間務めた退役軍人であり、また局長級の幹部もやったことがある。文革時には「懲役一三年に処す」といわれた……現在の村の情勢とはおおよそ関係のない身の上話が小一時間も延々と続いた。この間、工作隊は一言も質問を発することも、メモを取ることもなく突っ立っただけだった。なおも話し続けようとする老人を、ついにしさんが遮って、逃げるようにその場を立ち去る。

彼らは村民が直面している具体的な問題に、さしたる関心を寄せていないようだった。工作隊への参加は自らの希望ではなく、どの機関から何人、という上からの割り当てによって強制的に決められる。これはかつての工作隊にも共通しているが、現在では「大衆」をキーワードとした強いイデオロギー的な規制も働かなくなっている。ここから、派

遣幹部の活動も形式に流れやすくなるのだろうか。

工作隊はその日一日の活動を、毎日所定の日誌にまとめることを義務付けられている。記録係の乙さんが神妙に書いているのをチラと盗み見ると、「また新しい一日が始まった。

……我々は村民たちと非常に親しく交歓し……」のような他愛もない記述が目に入った。乙さんが思慮深そうな人物であるだけに、日誌の内容の無意味さは余計、衝撃的であった。

一方、少なくとも筆者が滞在した五日間、C局長が三人の隊員と一緒に農家を訪問したことは皆無だった。県内の農村出身者なので、村のことならわざわざ歩き回るまでもなく分かっている、という構えにも見える。C局長は村に身を置きつつも、常に意識を向けているらしいのは鎮や県城の政界・財界の方である。宴会を好むのも、県の人脈に自らをつなぎ止める手段として、それが不可欠だからであろう。少年時代に大躍

進後の飢饉を経験し、そこから「叩き上げ」て県の幹部となった局長は、宴会を用いた関係作りの重要さを誰よりも分かっているに違いない。

分裂の構図

工作隊の派遣は、上級の基層に対する不信感、ないしは基層自身の問題解決能力の不足に関連して行われることについて、冒頭に述べた。ここから、工作隊は既存の現地有力者からは一定の距離をおいて活動するというのが、どのような場合でも基本構図となる。工作隊は村のオフィスを訪問することはないし、村の幹部から事情を聴取することもない。

五日間、村の中にいて、幹部たちの存在、村組織の存在感がまるで感じられてこないというのは、ある意味、不気味でさえあった。いつもの筆者農村調査であれば、まず村全体の事情を熟知している幹部から聞き取りを始めるのが常だからだ。

ところが、一切姿を見たことがな

いと思っていた村の幹部に、実は度々出会っていたことに気づいたのは、最終日、もう村を去る準備をしていたときであった。

これまでも時々姿をみせていた、ひよろりと背の高い優男が、この日も我々の住居にやってきた。例によってダークスーツにチョッキを着込み、ズボンの裾は踵すれすれのところで止まっている。磨かれた革靴にはホコリ一つ付いていない。およそ農村らしからぬ出立ちである。何をしてもなく、所在なげにポケットに手をつ込み、筆者に話しかけてくる。こちらも彼のお洒落な着こなしを誉めたりして、それとなく相手になっていた。

その服装や物腰から、てつきりC局長が連れてきた鎮の幹部か、あるいはP市の幹部であろうと勝手に思い込んでいた。実は彼こそが、これまで村民の訴えの中で、腐敗した悪役として再三登場してきた村の書記だったのだ。まったくうかつだった。

工作隊員もこの優男を相手にするわけでもないが、かといってその場から追い払うわけでもなく、ごく自然に接しているの之余計に気づかなかったのだ。

工作隊も人間である。何度も顔を合わせたことがあり、普通に言葉で交わしたことがある人間であれば、いざというときに急に冷淡な態度をとることも難しいであろう。優男はそうした効果もあることを考えて、工作隊の標的が自分たち現職幹部であることを知っておりながら、ちよくちよく「顔を売りに」やってくるのだらう。

工作隊という電流の周りに形成される磁場は、幹部のみならず、一般村民をも巻き込んで、それぞれの利害関係の相違による立場を顕在化させる。「磁場」の形成は、非常に目立たないものだが、人々の微妙な行動ぶりから、はつきりと見て取れるものだった。

ある時、隊員三人がたまたま皆出

払ってしまい、C局長と筆者は、二人だけの気まずい夕食をとっていた。そのとき、救世主が現れた。隣家に住む中年の村民が、片手に贈り物の海苔の入った袋をぶらさげ、にこやかに入ってきたのだ。

C局長も沈黙に耐えかねていたのだらう、一気に弾みがついたように、快活に相手を出迎えた。わざわざ工作隊を訪問するということは、この隣家の住人は腹に一物隠し持っているはずだが、簡単に手土産など受け取つてもよいのだらうか。そう思いはじめた矢先、数人の女性らしき人影が中庭に入ってくるのが見えた。

その婦人グループには、当日の昼間、筆者が散歩中に出会って話を聞いた女性も含まれていた。現職幹部たちが行っている不法な土地の売却や、村民に対する横暴な仕打ちについて訴えたのだ。現在、村の耕地のうち、幹線道路両脇の一等地の大部分は、それを請け負っている農民の同意なく外部の企業に売却され、し

かもそれに対しては何の補償もなさ
れていないという。耕地の売却によ

る収益はそのまま幹部たちのポケッ
トに入り、彼らはそれで食べる、飲
むのほか、豪邸を建てている。「誰当
官誰富」（役人が儲けてばかりいる）
というフレーズが、言葉の間にしば

しば挟まれる。新聞や雑誌の紙面で
は度々見かけるこうしたシナリオ
も、現実には農民が涙を流しながら語
るのを聞くと大変なリアリティがあ
った。婦人らが現状を訴えるため
に工作隊を訪ねても良いか、という
ので、構わないと答えておいたのだ。

婦人連は用心深げに内部を窺いな
がら台所の方から入ってきたが、隣
家の村民の姿を認めると、「あいつが
来ている」と露骨にいやな顔をした。
一方、婦人連の来訪に気づいた隣家
の村民は、極めて不自然に、まるで
逃げるように暇を告げてその場を後
にしたのだ。

こうした村民らの動きから、村の
内部には、利害関係によるある種の

「分裂の構図」が見え隠れするような
気がしてきた。

そういうえば、これまで工作隊とと
もに訪問した家庭でも、それぞれ現
状への不満が出てくる点には変わり
はないが、強調点には微妙な違いが
あった。たとえばある家庭では、母
親と若い娘が在宅であったが、二人
はあまり口を開かず、その場に居合
わせた友人らしき中年の婦人が、

もっぱら水利の問題について不満を
述べた。それまでも耕地の灌漑が困
難であることは、天に頼って飯を食
う（「靠天吃飯」）現状への嘆きとし
て、多くの農民の訴えるところとな
っていた、しかし、それまでは水利
の不便が幹部の批判とワンセット
で出てきたのに対し、ここでは「貧
しいので仕方がない」というあきら
めの口調が前面に出ていた。井戸を
掘っても水そのものがすぐに枯れて
しまうのだという。

もしもこの村に「分裂の構図」が
あるとすれば、水利の問題に関して

は、それを人災ととらえるか、天災
と捉えるか、の違いに現れるのでは
ないか。すなわち幹部に近い関係を持
つことで何らかの恩恵を蒙っている
村民は、例え灌漑が不便でもこれを
「天災」ととらえ、逆に幹部グルー
プから遠く、耕地を売却されるなど
虐げられている者は、これを「人災」
として捉え、不満を訴える傾向にあ
るのではないか。

こうした漠然とした感触が、ほぼ
確信に変わったのが、ある若い農民
を自宅に訪ねた最終日前夜のこと
だった。彼には数日前に畑の中でイ
ンタビューしたことがあった。家族
状況や耕地請負状況について尋ねた
あと、請負費の支払い額に筆者の質
問が及んだ。この話題になったとき、
彼はやや慌てた様子で、請負費とい
うものではなく、土地税であり、とい
う話に持っていこうとしたが、最後
は「複雑でよく分からない」という
ような結論になった。それはいかに
も不自然な取り繕いに見えた。

ふと気づくと、隣室で夕食の準備をしていたはずの夫人が、いつのまにか横に立っている。食事の仕度ができたのだろうと思ひ、いずれにせよ退散しようとして、「お邪魔しました」と声を掛けたが、彼女はその能面のような表情をびくりとも動かさない。それは不審な闖入者に対する、ぞつとするまでに徹底した拒絶であつた。

続いて夫婦の間では、「そういうことは大隊（村民委員会＝引用者）で説明させればよいことじゃないの」「ただのおしゃべりだ。構うもんか」というようなやり合いがひとしきりあつた。大いに慌てて退散しようとする筆者を、夫はややすまなさそうに、門まで送ってくれた。

若い妻は、夕飯を準備しながらも、隣室の話に聞き耳を立てていたに違いない。そして得体の知れぬよそ者べらないよう、警戒していたものと見られる。別の村民によれば、幹部

グループの側につく人間は、立場が微妙な者を含め、村内で半分くらいはいるのではないか、ということだった。こういう現職幹部につながる村民は、おそらくは耕地の請負費を含め、各種の「費用」の徴収を免れたり、様々な恩恵を受けているのだろう。若い農民の家庭もそうした世帯の一つであり、妻の拒絶反応も、要らぬことを口外して現在の立場を危うくしないため、ととらえるのと辻褄が合う。もしも何もなければ、あのような態度をとるはずがない。

真つ暗な夜道を引き返しながら、短い今回の滞在で見えてきたことを、自然に反芻していた。

基層における既存の権力分配の中で、既得権益を有する有力者グループは、「実力主義」的かつ私的営為をもつて村の「自治」に代える。他方、そうした営為に不満を持ちながらも、孤立分散した農民世帯は基層内部での問題解決において非常に無力であり、そこから外部の政治的権威

に恃んで、上級が自らの問題を解決してくれることを切望する。さらに上級政府の側は、基層の実力者と問題解決能力に対して、常に潜在的な不信任を抱いている。

こうした変わらない構図の中にあつて、工作隊派遣の方式は今後においてもおなじ、中国基層社会の有意味な構成要素でありつづけることだろう。

（東京大学大学院
総合文化研究科助教授）